

## 姉さん女房

妻の菊代は私より三つ歳上の姉さん女房で、この九月で四十歳になった。

菊代は主婦として子供達の世話や教育、日常の家事まで、毎日嬉々として奮闘している。

歳上妻の羞恥心もあつてか私に仕える姿は愛しさが溢れている。

もともと明るい性格だから、周りの者にも好かれ、ご近所でも好印象を持たれている。

今年で結婚16年目になり、子供も男女2人できたので、女の勤めは果たしたと、今はその教育と趣味の習い事に熱中している。

## 菊代の体調

菊代の日常は、子供たちの母であり家の主婦であるが、私の妻としての役割もある。

親類との付き合いや会社関係の結婚式や葬儀、夫婦同伴の催しなど、妻としての顔が必要な場面も多々あり、外に出ることも多くある。

年上妻なので夫の体面にも気遣つて流行りのエステなどに通い、平素から容姿にも気をつけているようだ。

いつも明るく元氣の良い菊代だが、先週末からいつもと様子が違う感じがする。

風邪でも引いて体調が悪いのかもしれない。少し辛そうで何時もの笑顔がない。

生理かと思ひながらも、どこか具合が悪いのかと聞いてみた。

「そう見えました、女のことですから！ すぐに治りますから、心配しないで。もう歳だから体調も変わってくるのね。気を遣わせてごめんなさい！ 大丈夫、あなた。」

明るく作って言っているが本調子ではないようだ。

「今度の土曜日は、例の婚礼の出席を出してあるよ。大丈夫か？ 主賓だから頼むよ！ 元気出さないよ！」

朝の出掛けにはこれで終わつたが、帰宅して風呂や食事が終わり、ソファで新聞を読んでいると、寝室に来てほしいと菊代に呼ばれた。

「あなた！ こんなこと恥ずかしいけど困つたの！ 今週お通じが無くてお便秘してて…！ 色々してみたけど…！ だんだん苦しくなつて！ 婚礼のお呼ばれも… お便秘でお医者も恥ずかしいッ！ あなた… すみませんが、お浣腸してくださいな…！」

菊代はよっぽど辛くなっているらしい。

早く言えばいいものを、今まで自分でなんとかしようとして、かえって悪くしたのだろう、半べそで泣き付いてきた。

寝室の箆笥の薬の引出しには、傷薬、風邪薬や胃腸薬、軟膏や湿布など日常の手当に必要な薬が用意してあるが、イチジク浣腸もあるはずだ。

亡くなった母が持っていた浣腸器もグリセリンもまだ半分ほど瓶にあつたはずだ。

もしイチジクで効かなかつたら、あの浣腸器で多めに浣腸してやろうと考えた。

夫にされる浣腸がよく効く事は、菊代のお尻がよく覚えている。

それは浣腸した後、腸の中が熟して蠕動が十分に始まるまで、私に肛門をしっかりと押さえられ、排便を我慢させられるからだ。

## 菊代の微熱

「あなた、これでいいですか？ こんなお願い！ わたし… もう恥ずかしくって！」

菊代はいそいそと寝室に敷かれた布団の横に浣腸に必要な物を出して並べている。

イチジク浣腸、ワセリンの瓶、綿棒、カット綿、タオルなど必要なものを準備していた。

「あなた… これでいい？ 何か足りませんか？」

「そうだな！ ついでに体温測ろうか？ 便秘で微熱があるのかもしれない。体温計も出しておいでッ！」

「はいッ！ あなた、あッ！ ティッシュも忘れたわ…」

菊代は自分の肛門に入れられるデジタルの体温計と、ティッシュペーパーを持って戻ってきた。

菊代はスカートを脱ぎ、布団の上でうつ伏せの姿勢を取り、フルバックの白いパンティに包まれた大きな尻を出している。

私がパンティを腰からクルリと剥いて尻を出すと、恥ずかしくて股をピッタリ合わせ、股内を隠すようにしている。

合わせ目の間からは、ぷっくりした陰唇がはみ出すように潰され見えている。

菊代を正座させそのままうつ伏せにして、尻を挙げて肛門を出す姿勢にさせた。

「あなた！ 早くしてください！ もう恥ずかしくて！ そんなに見てちゃ… もうイヤッ！」

菊代の股の合せめからは愛液が滲み出していて、それを見られたくないのか、両腿を擦り合わせてモジモジとしている。

浣腸だから肛門を出さなければならぬが、菊代は恥ずかしくて股を開こうとしない。

私は菊代の双丘を開けて奥の肛門を出した。

隠れていた董色の肛門が晒され、菊代はそこに視線を感じたのかキュッと締めた。

もつと股を開く様に尻を叩いてみたが、尻を振って嫌がっている。

仕方がないと、左手で尻たぶを大きく開き、指にワセリンを付けて菊代の肛門に塗りこんでマッサージをした。

「ああッ！ あなたーッ！ イヤン！ そんなッ！ 早くしてえ！」

体温計をワセリンで光る肛門に差し入れてみる。

5センチほど入れるとゆっくり抜けてきてしまう。また深く入れ直してやると、アッ！ と鳴いて身を揉みながら陰唇をジユッと濡らした。

抜いた体温計の数字を見ると、7度5分の熱があった。やはり一週間も便秘して微熱が出て体調が悪かったのだろう。これからの浣腸で宿便を出せば、体調は戻るだろう。

「あなたッ！ お熱あつたの？ エッ！ それで具合悪かったんだわ！ はやくッ！ お浣腸してくださいーッ！ このままじゃ、あなたッ！」

菊代は尻を開けられたまま浣腸の催促をしている。

体温計を抜いた後に指を入れてみると、肛門のすぐ奥に硬い糞便の塊があつた。

この便秘の様子ではイチジクの一つや二つでは効果ないだろう。

効かなかつたら浣腸器で量を入れてやるしかない。まず手始めにイチジクで浣腸を試みようとして、指で肛門を開いた。

### イチジク浣腸

「アアッ！ イヤッ！ この歳であなたにお浣腸なんて、ほんとに恥ずかしいわッ、あッ。

イヤン、うッ！」

イチジクを肛門に差し入れて注腸すると、菊代は肛門をぎゅつと締める。

股間の陰唇からは、愛液がツツツと腿に滴り落ちた。

「アアッ！ あなたッ：：！ アンッ！ 恥ずかしいッ！ そこ見ないでッ！ イヤーッ。」

便秘した姉さん女房が、亭主に浣腸される強い羞恥に刺激されて、菊代は知らずに淫水を漏らしている。

注腸が終わりイチジク浣腸を抜かれた後は、薬が効くまで肛門を抑えられ、我慢させられる。

私は肛門を押さえながら菊代の様子を観察していると、菊代はお腹を摩りながら便意が出るのを待つていようだったが、

「あなた！ なんだか一つじゃ効かないみたいなの？ もう一つ入れてくださいッ！ アンッ！」

菊代の濡れた肛門に指を入れてみると、まだ硬い便塊が肛門を塞いでいる。

菊代は恥ずかしかがって肛門をきつく閉めたが、かえって私の指を啜え込んでしまい、慌てて肛門を緩めるのだった。

「菊代！ これじゃイチジクでは効き目がないよ！」

浣腸器を用意するからそのまま待っていなさい！」

母の代に使われていた硝子の浣腸器を出して、グリセリン50%の浣腸薬を200cc作った。

菊代は肛門を上に向けたまま、次の浣腸を待っている。

四十になった姉さん女房が、大きな尻を挙げて陰唇を濡らしながら、浣腸を待つ恥ずかしさに菊代は顔を伏せて隠す。

「あなたにお浣腸されると、凄く恥ずかしくつて、直ぐに抱かれない！ て感じてしまうのッ！」  
最近の菊代は自分の熟れた身体を私に扱われることに、深い幸せを感じるようになっていたのだ。

## 硝子の浣腸器

「菊代ッ！ さあ！ 浣腸続けるよ！ いいかい！」

私はグリセリン50%の浣腸液の入ったボールに50ccの硝子の浣腸器を入れて部屋に戻った。

菊代はイチジクを入れられた姿勢のまままで次の浣腸を待っている。

これからまたワセリンに濡れた肛門に硝子の浣腸器の嘴管を咥えさせる事になる。

「はいッ！ あなた！ ハヤクツ！ お浣腸してッ！ ハヤクツ！」

私は、菊代の尻を広げ、露わになった肛門に硝子の浣腸器を上から静かに差し込んだ。

「アッ！ イヤンッ！ ダメッ！」

菊代は浣腸器の嘴管をキュツと咥えると、急に大人しくなり浣腸液を受け入れている。

注入し終わった浣腸器を抜くと、肛門はキュツと絞まる。

さらに薬液を吸い上げて2度目の浣腸をする。

菊代は嘴管を迎えるように尻を突き出し2度目の注腸を受け入れた。

膨れた陰唇からは女の蜜が滴り、飾り毛をキラキラ濡らしている。

二本目の注腸が終わると、菊代は苦しそうに顔を上げて、便意を訴え始めた。

「あなたッ！ もうッお腹痛いの！ もう出そうなの！ あなたッ！ 効きましたッ！ お便所行かせてッ！ 嗚呼ッ！ あなたーッ！」

「菊代！ 上向きになってごらん！ さあッ！ 脚を上げて両手で抱えてッ！ そうッ！ まだ漏らすなよッ！」

菊代の体を上向きにさせて、両脚を抱えて尻を挙げ、肛門を上に向けおむつ替えの姿勢にさせた。菊代は私の目を見つめて哀願し始めた。

「あなたーッ！ イヤ、恥ずかしくってハヤク、オカンチョウーッ。」  
それに構わず3本目の浣腸をゆつくり準備した。

200cc準備した薬液はまだ半分残っている。

シリンジの先を透明のボールに入れ、グリセリン溶液を50ccの浣腸器一杯に吸い上げ、菊代の上を向いた肛門に差し込んで注腸する。

菊代は顔を手で覆って忍び鳴きながら、浣腸液を受け入れてしまう。

3度目の注腸が終わり、浣腸器を抜かれると、菊代の肛門がギュツと締まり、その後少し弛んで浣腸液が滲み出た。

菊代はそれを止めようとまた肛門をきつく締めたが、その拍子に尿を漏らした。

「アアッ！ 恥ずかしいーッ！ もうダメッ！ 許してーッ！ 出ちゃうッ！」

菊代の大腸はすでに蠕動が始まっていて、グルグル、キュツグウ！ と鳴り出し始めている。

絹代はその効き目に苦しみながらも、丸見えの淫部を女蜜でヌルヌルと濡らしている。

指で陰唇を分けてクリットを弄りながら菊代の表情を見ると、

「アアッ！ あなたッ！ ダメ！ そんな事してーッ！ 漏れちゃうわッ！ アアッ！ あなたンッ！ イヤッ！」

敏感な女芽を弄られた菊代は、悶えながら排泄を哀願する。

構わずに4本目の溶液をシリンジに満たした。

「さあッ！ 菊代！ これで最後だよ！ 良くがんばったね！ これでお前の便秘は綺麗になるよ！ 僕の奥さんはこんなに濡らして可愛いね！ お前の浣腸姿はいつ見ても可愛いよ！ 十歳若返って見えるようだッ！」

最後の浣腸の嘴管を菊代の熟れ切った肛門に差し入れた。

「アアッ！ あなたッ！ もうッ苦しいッ！ 許してッ：：く・だ・さ・いッ！  
あ・な・た：：」

シリンジの嘴管が入れられると、羞恥触れる声で鳴きながら、菊代の肛門は震えながら200ccの浣腸液を飲み込んだ。

## 愛の叫び

「もうダメ！ そんなに一杯お浣腸して！ アアッ！ 苦しいわ！ あゝ、あなた、もうなんでもしてッ！ スキです：： ダイスキ！」

菊代は私の前で媚態を作り、便意の苦痛に耐えている。

私は菊代の肛門を脱脂綿で押さえ、腹部を撫でてもう少しと我慢をさせながら菊代の表情を見ると、菊代は薄つすらと涙を溜め小さく甘え声で

「愛してますッ！ あなたッ！」

と伝えてきた。

年上の姉さん女房が主人に浣腸されて肛門を押さえられながら愛を感じている菊代の姿は、可愛いくも妖艶な大人の女の姿だった。

「もうダメッ！ あなたッ！ ほんとなのーッ！ ハヤクーツ！ お便所ーッ！ あなたー

ッ：： アアッ！」

私は菊代を抱いて便所に連れて行き便器に座らせた。

長かった浣腸が終わり、漸く便座に座ることができた菊代は、前に立った私の腰をきつく抱きしめながら、ホツとして肛門の力を緩めた。

「アアッ！ 見ないでッー！ イヤーッ！ 恥ずかしい！」

ビビビーツブツッ！ ブビーツ！ ピツ！ ブイーツ。

排便の恥ずかしい音と匂いが立ち込め、菊代の羞恥の呼吸と共に山盛りの浣腸便が便器に溜まっていく。

菊代は夫に見られる恥ずかしさと排便の気持ちよさに酔い、私の怒張した肉棒を口に啜えて扱きながら、その快感に淫水をどつと漏らしてしまった。

「あなたッ！ スキッ！ ダイスキです！ 愛してますッ！」

菊代は涙目で私の顔を見上げて訴えるように愛を告白し、同時に大腸の奥から最後の宿便をビチビチと絞り出してしまった。

